霧の舞姫

Je

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の舞姫

【Ｎコード】

Ｎ０２９９Ｆ

【作者名】

Ｊｅ

【あらすじ】

都内の公立高校に通う普通の高校生、渡世霧。若干巻き込まれ体質なところはあるものの、仲の良い幼馴染や友人にも恵まれ、ごく普通の高校生活を送っていた。だがある日を境に、彼の日常は大きく変わってしまう。同時に、何度も夢に出てくる人の言葉を介す白い狼。世界の理を知ったとき、彼は何を思うのか。

第1話　いつまでも

都内某所、八月某日。
学生の特権、夏休みの真っ只中に、俺は教室で机に突っ伏している。
「おそい・・・いつになったら来るんだ・・・・・・」
そうつぶやき周囲に視線を巡らせる。教室には他に五～六人の生徒がいて、俺と同じように机に突っ伏しながらウダウダ言っていた。
それもそのはずだ。夏季補習の為に朝早く起きてはるばる登校してきた彼ら（俺もだが）は、もう授業開始の時間から一時間近くも待たされているのである。教室に二台備え付けてある冷房は恐ろしく古い型で、それまで稼動していたのが不思議なぐらいだったのだが、先月ついに悲鳴を上げて力尽きた。その為今の俺たちは、モロに真夏の熱波を全身に受けているのである。
そんなとき、
「あはは、そんなイライラせずにのんびり待と～よ」
と、後ろから能天気な声がしたので振り返る。
綺麗に日焼けした少女がニコニコと笑っていた。
「・・・舞（まい）」
肩の辺りで切った少し茶色い髪に、クリクリした大きな目、とても可愛いらしい容姿をした少女だが、いかんせん背が低いため、見ようによっては中学生ぐらいにも見える。そんなあどけなさの残る幼馴染に、
「お前・・・なんでそんなに元気なんだよ・・・」
と、ため息交じりに問いかける。少女はニコニコ顔のまま答えた。
「ん、だってさ、今日は霧（きり）ちゃんの誕生日だよっ、もちろん家でパーティーするんでしょ？　たのしみ～」
・・・そういえばそうだった。うちの親は無類のお祭り好きで、

何かあるたびにパーティーを開こうとする。息子の誕生日も例外ではなく、生まれてから十七年間一度も欠かさずにパーティーを開いているわけで、俺からすればもうそんな事をしてもらうような年じゃないので、そろそろやめてほしいものなんだが・・・。

そして、昔から家族ぐるみで親交がある舞の家族、時元(ときもと)一家も何故か毎年その行事に付き合ってくれるわけであり、本当になんだか心苦しくなる。

「あ〜、だからそんなテンション高いのか。でもだからってこの不当な扱いを許せる俺ではないぞ」

時計の針を見てみると、そろそろ十時を回るところだった。一時間すぎちまったよほんとに・・・。

「でもでも、テストの点悪かったあたし達が悪いんだしさ、天罰ってことで！」

言った瞬間にクラスにいた奴らがカッと目を見開き舞を睨み付ける。当の本人は不穏な空気を感じ、あうっ！？　とか言って黙り込んでしまう。ざまぁみろ。

それに俺はテストの点が悪かったわけではない、まさか今時名前を書き忘れて０点なんてミスをするとは思わなかったんだ。いや、それもかなりイタいか・・・うう・・・。

などといらぬことを考え、余計なダメージを負ってしまった俺は再び机に突っ伏してしまう。

そこに、

「オーッスお前ら、遅れてスマンなぁ、ガッハッハ。来る途中で限定販売の初代ガンダモのプラモデルが売ってあるのを見つけてな、ついつい並んで買っちまった、フハハ、いいだろーう！」

生徒たちと違い、暑苦しいほどハイテンションなビッグフットこと山中嵐(やまなかあらし)（担任、三十五才独身）が教室に入ってきた。

その瞬間、一人を除いた全員の殺気が彼へと集中した。その一人、舞は「あ〜う〜」とか言いながらオロオロしている。

山中も様子がおかしいことに気づき、

「な、なんだお前たち・・・せ、先生に向かって・・・」
などと言っていたが、通勤中にプラモデルを買うような男が、あの暑さを耐え抜いた野獣たち（×多数）に勝てるはずも無く・・・。
「や、やめてくれ！　あぁぁ！　お、俺のガンダモがぁぁぁ・・・・・」
煩いぐらいのセミの鳴き声に混じり、暑苦しい男の悲鳴が真夏の校舎に響き渡った。

「ねーねー霧ちゃん！　帰る前にさ、ちょっと付き合ってくれない？」
補習も終わり、二人で一緒に下校していると、舞がそんな事を言い出した。
「いいけど・・・どこ行くんだ？」
「うふふ～、それは言えませんヨ！　お楽しみって事で！」
「はぁ？」
不審に思いながらも、まぁパーティーを楽しみにしてるのはこいつだし、そんなに遅くなることはないか、と素直に付き合うことにする。
舞に連れられてしばらく歩いていくと、
「駅じゃねぇか、まさか電車に乗るのか？」
露骨に嫌そうな顔をする俺を見て舞はプッ、とふきだし、
「あはは、そんなわけないっしょ！　こっちだよこっちー」
と、駅の横の某大手デパートへと入っていく。

「なんだよ、なんか買うのか？」
「ん～、どうだろねぇ」
「・・・はぁ？」
　ますますワケがわからないという俺の顔を見て、舞はクスクスと笑っている。なんなんだ一体。
　エスカレーターで少しあがったところで、舞は俺に座って待っているように言い、どこかへ走っていってしまった。仕方なく木でできた洒落たベンチに腰を掛け、大人しく待つことにする。すると、五分もしないうちに幼馴染の少女が走って戻ってきた。
「おまたせ～、はいっこれ！」
　元気のいい声と共に差し出されたのは、綺麗な花の彫刻が刻まれたネックレス。
「へ・・・？」
　突然のことに戸惑う俺に、彼女は少し照れくさそうに答える。
「えへへ・・・皆より先に渡したかったんだ～、お誕生日おめでと！」
　ポカン、と口をあけた俺は本当にマヌケな顔をしていたと思う。それが狙い通りだったのか、舞は嬉しそうに笑っていた。
「ほらほら！　なんか言うことは？　こ～んなかわいいレディからプレゼントなんか貰っちゃってさっ！」
　なんとなく舞を見るのが恥ずかしくて、少し俯きながら口を開く。
「あ・・・ありがと・・・」
　我ながら情けない声だったが、幼馴染の少女は満足そうに「ど～いたしまして～！」と胸を張る。
　そして、
「ねぇ霧ちゃん」
　不意に真面目な声色に変わり、俺を呼ぶ。
「うん？」
　俺もそれに顔を上げて答えた。
「・・・これからも、来年も、その次も、十年たってもお爺ちゃん

お婆ちゃんになっても、毎年お祝いしてあげるからね」
何故突然そんな事を言い出すのか理解できなかったが、
「あぁ」
真剣な顔でたずねてくるので
「俺もそのつもりだよ」
と笑いかけてやる。
舞は「うん！」と大きく頷いて踵を返し、走り出す。
「家まで競争だよ、負けた方が来月のお昼ご飯代おごりねっ」
と言い残して走り去る。来月・・・昼飯・・・おごり・・・。少し思案してハッとする。
「待てお前それはダメだろ！」
来月といえば普通に学校がある。つまり毎日奢ることになる。
それに気づいた俺は必死で追いかけた。デパートの警備員が何か叫んで怒っていたが、知ったことではない。来月は色々とほしい物があるんでね。

第2話　霧中の白狼

「げっ、もう追いついてきたのー！？」
舞の後ろ、５ｍほど離れたところを走る俺を見て、彼女が叫ぶ。
「ふっ、俺に足で勝とうなんざ十年早いわ！」
俺も俺で、運動会で好きな子にいい所を見せようとする小学生ばりに、本気で舞を追う。
そして、二人並んで大通りを横切ろうとしたところを、
「あぶない！！」
誰かが声を張り上げるのが聞こえた。
直後、けたたましいクラクション音、衝突、そしてタイヤが地面を滑る音。
音のする方向を見ると5人乗りの乗用車が止まっていたバスに衝突し、バランスを崩した車体がそのままこちらへ横滑りに向かってくる。
「舞！！」
その進行方向にいる少女は、突然のことに身動きを取れないでいるらしい、呆然とその様子を眺めていた。
（くそっ！）
考えるより先に体が動いていた。そのまま彼女を押すように飛び出し、そして、
「き、霧ちゃん！？」
舞を少し先へ突き飛ばした俺が最後に見たのは、何かを叫びながらこちらへ手を伸ばす幼馴染。
鈍い音と共に全身を駆け抜ける衝撃、そして浮遊感。俺の覚えているのはそこまでだった。

深い森、であった。
目の前に広がるのは所狭しと生える木々。
ただでさえ視界が悪いのに、深い霧に覆われているせいでまったく足元が見えない。
そもそも自分は何故こんな場所にいるのか、さっきまで舞と一緒に帰っていて・・・それで・・・。
ポウッ・・・、１０ｍほど先で、何かが光った。
「あれは・・・」
この深い霧の中でも、それはよく見えた。自然と足がそちらへ向かう。
「・・・しっぽ？」
足元に注意しながら進んでいくと、その光るものの正体がフサフサの毛で覆われた尻尾であるとわかった。
と、同時に。
（・・・やばいかも）
嫌な汗が背筋を流れる。尾があるということはそれは動物、しかもその長さと太さからしてかなり大型の。何も考えずに進んできてしまったが、森の中で大型の獣と遭遇。これってかなりやばいんじゃないだろうか。
どうやってここから離れようかなどと考えていると、
『・・・来たか』
澄んだ声が聞こえてきた。
いや、聞こえたというより、耳を介さず頭に響いてきたと言うべ

きか。
「え？」
素っ頓狂な声をあげてしまい、あわてて口を塞ぐが遅かった。
海のように蒼い、不思議な光を放つ瞳と目が合う。その尾の持ち主は、雪のように白い体毛に覆われた狼だった。
『そう警戒するな、少しお前と話がしたくてな』
喰われる、と思って身を強張らせていると、再び脳内に声が響いてくる。男のもの、女のもの、あるいは子供のものにも大人のものにも感じられる不思議な声は、そのまま語りかけてくる。
『渡世霧。お前を待っていた』
慌てて周りを見回してみるが、先程より幾分深くなった霧に覆われ、何も確認できない。だが人の気配は全くしなかった。
となると、
「この声・・・アンタの？」
目の前の白狼に問いかけてみる。すると、ソイツは人間のように眉間に皺を寄せ、
『私以外に誰がいる、おかしなヤツだ』
普通の答えを返してきやがった。いや、俺がおかしいのか？　喋る狼ってのは結構いるもんなのか？
『まぁよい、それよりもそこに座れ。色々と聞かせて欲しい事があるんでな』
そしてそいつは顎でクイッ、と俺に座るように促す。一歩後ろに下がると、コツンと膝の裏に何かが当たった。振り返ってみると木製の、立派なロココ方式の椅子が置いてあった。
いつの間にこんなものが・・・。
『さぁ時間が無い、早く話を聞かせてくれ』
その白狼は、ソワソワと尻尾を動かしながら俺を見つめる。
話っつっても、何を話せばいいのだ。と思っていたのだが、そいつは学校のことや友達のこと、家族のことなど、その神秘的な見た目に反して普通の質問ばかりしてくる。

そんなの知ってどうするのかと不思議に思ったが、俺の話を聞くたびに心なしか嬉しそうに頷いてるので、つい話し込んでしまった。
どれぐらい経ったのだろう、話題も尽きてひと段落したところで、その白狼が立ち上がった。
「うおっ、なんだ？」
突然の事で驚いた俺は椅子から転げ落ちそうになるが、なんとかバランスを保つ。
『・・・時間だ。霧、ありがとう。楽しかったぞ』
まるで人間のように微笑み、そいつは俺の横を一気に駆け抜けていった。
「えっ、ちょっ！？　まてよ！」
振り返ったときにはもうその姿は見えなくなっていた。残るのは微かに甘い香り。だがその白狼が走り出す寸前、確かに見えたのだ。柔らかな微笑を浮かべた美しい女の人が。
どこかで見た事がある気がしたが、どうしても思い出せない。
「なんなんだ一体・・・」
そこで、再び意識が途切れた。

右手に感じる温もりと、微かに鼻腔をくすぐる甘い香りで目が覚める。
目の前にあるのは・・・天井だろう、蛍光灯が眩しいぐらいに光

を放っていた。
「夢・・・か」
あの白狼との出会いは夢の中での事なのだろう、それならばいきなり森の中にいた事も納得ができる。
上半身を起こそうとして、右手に微かな重みを感じる。そこには、
「・・・すぅ・・・すぅ」
俺の手を握ったまま、気持ちよさそうに眠る幼馴染の姿。
「舞」
俺が苦笑しながら声をかけると、舞は少し眠たそうに頭をあげた。
「・・・」
「・・・」
トロンとした半開きの瞳でこちらを見つめてくる。俺が思わず噴出しそうになるのと、少女が完全に覚醒して抱きついてきたのはほぼ同時であった。
「霧ちゃぁん！」
「うおっ！？」
あまりの勢いでベッドの反対側から転げ落ちそうになるが、なんとか踏みとどまる。さっきもこんな事があった気がするんだが。
「よかったぁ・・・このまま目が覚めなかったらって思うと・・・よかったぁ・・・」
グスッ、と鼻をすすりながら目じりに涙を浮かべる舞。そこで、俺はようやく自分の置かれている状況を理解した。
「病院・・・か？　なんで俺がこんなとこに」
真っ白い壁とカーテン、同色の枕とシーツ、そしてベッドの横に備え付けられたなんかよくわからん機械。幸い俺には使われていないみたいだが。
「うん、あのね・・・」
「霧君！　大丈夫かい！？」
説明しようとした舞の声を遮って若い男の人の声が飛び込んできた。時元智弘（ともひろ）さん、舞の父である。

「あ、はい。このとおりピンピンしてますです」
ちょっとびっくりして意味のわからない口調になってしまったが、一応無事だと伝える。
智弘さんはさほど気にした様子も無く、
「そっか・・・よかったよほんとに。しかし舞を庇って車の前に飛び出すなんて・・・霧君、男らしすぎるよ・・・君になら娘をあげ・・・」
もーお父さん！　と、舞が顔を真っ赤にして叫び出したため語尾ははっきり聞こえなかったが、病院でそんなに大声上げちゃだめだろ、と窘(たしな)めておく。舞はうう・・・と黙り込んだ。
「ハハハ、けどほんとによかったよ何事も無くて。誕生日に事故で病院送りってのは残念だけどね・・・」
思い出した。それに関しては俺も苦笑するしかない。昔から色々と運が悪いとは思っていたが、まさかプレゼントで交通事故をいただいてしまうとは。
「えーと、どれぐらい入院しないとだめなんでしょうか」
「あ、いや目が覚めたから今日中に出られるらしいよ。あの事故で擦傷と軽い打撲程度なんて、すごい奇跡だね」
・・・軽い打撲？
確かに肩が少し痛む程度で、どこかの骨を折った形跡も無い。だがあの事故でこの程度の怪我で済むなんて、不思議で仕方が無かった。
「ほんとに・・・びっくりしたよぉ・・・霧ちゃん車にぶつかってポーンって飛んでっちゃうんだもん・・・・・・」
いやそんな軽いノリで言われてもな・・・確かにかなり長い時間飛ばされてた気もするが。
ま、軽傷で済んだんならそれでいいか。下手に入院なんかして貴重な夏休みを潰されたくないからな。
「父さんと母さんは？」
「あぁ、今先生に話を聞きに言ってるよ。すぐ戻ってくると思うか

らちょっと待っててね」
なるほど、じゃあもう一眠りするか。
「あー、アタシも眠い・・・なんか疲れちゃった」
「こら舞、霧君に迷惑だろ」
再び先程の体勢に戻ろうとする舞を、父親が窘める。
「あはは、別に構いませんよ。疲れてるんでしょう」
本当に眠そうな幼馴染をみて、俺が弁解する。
「そっか、じゃあ・・・・・ごゆっくり」
意味深な笑みと共に発せられた最後の「ごゆっくり」が気になったが、まぁいい。
そして俺は再び、深い眠りに落ちていくのだった。

第3話　コワレル日常

車に轢かれて即日退院という快挙をやってのけた俺は、家に帰るなり自室のベッドへ倒れこんだ。
ボフッ、という音と共に、柔らかな感覚が全身を包み込む。
病院で見た夢。深い霧に包まれた森での、神秘的な白狼との出会い。
一度はただの夢だと割り切ったが、あまりにも生々しいあの感覚。
体に纏わりつく濃霧の冷たさ、生い茂る木々のざわめき。そして・・・雪を纏ったような白狼。
今でも鮮明に思い出す事ができるそれらは、本当に俺の頭の中だけで繰り広げられた空想なのだろうか。
だが今更考えても答えが出るはずも無く、俺は体を起こし、テレビのリモコンを手に取る。
スイッチを入れ、チャンネルを回していると、ちょうど昼間の事故のニュースが流れていた。
画面に写し出されていたのは、横向きに倒れた大型バス、そして真っ黒なタイヤ跡を残した、車体前方をぐにゃりとゆがめた自家用車。
「我ながら・・・よくこれだけで済んだもんだ・・・」
と呟きながら、頬に貼られた絆創膏を撫でる。
横断歩道で俺をはねた跡も、その車は少し横滑りに進んでいたようだ。４本の黒い軌跡を残して歩道から５ｍほどのところで停車していた。
「ったく・・・どこのアホドライバーだ？」
と、テロップで名前が出るのを待っていたのだが。
「運転手が・・・いなかった？」
警察の発表によると、駆けつけたとき既に車の中はモヌケの殻だったとのこと。

はじめは犯人が逃亡したのだと思い、捜索を行ったのだが、あれだけ多くの人が目撃した事故にも関わらずそれらしき人物を見た人は皆無だったという。
車のナンバーも調べたが、誰かが購入した記録はおろか、会社側でもそのような番号の車を生産した記録が無かったそうだ。
「どういう事だよ・・・ワケのわからん無人車に殺されかけたのか？　俺は・・・」
どうにも釈然としなかったが、そこでニュースが終わり、若手専門のお笑い番組が始まったので、テレビのスイッチを切ってもう一度横向きに倒れこむ。
ちなみに例の誕生日パーティーは、さすがに当人が車に轢かれたというのに実行するわけにもいかず、中止になりかけたのだが、舞が本気で落ち込んでいるのを見て、
「そうだ、じゃあ来月の舞ちゃんの誕生日に一緒にやっちゃおうか」
という渡世母（渡世雪（ゆき））の提案により、一月遅れで無事行われる事となった。要するにバカ騒ぎしたいだけだろう、という質問には、
「・・・そうよ？」
と、何の悪気も無く普通に返されたのでもう何も言わない事にした。
一通り今日の回想を終え、胸ポケットから綺麗な花の彫刻が刻まれたネックレスを出す。
幸い一緒に入れてた生徒手帳がクッションになり、壊れたような形跡は無い。
「こんな高そうな物を・・・」
花の名前はわからなかったが、素人の俺が見ても、とても手の込んだ品物。
繊細な彫刻、細部までこだわった色づかい。どう見ても高級品だった。しかし、
「俺、男だぞ・・・こんな可愛らしいネックレスもらっても・・・」
舞のことだ。多分自分で試着して、わーこれいい！　って感じで

購入を決めたのだろう。
ま、それがアイツのいいところでもあるんだけどな。
そこで夕食を知らせる母の声が聞こえたので、幼馴染からのプレゼントを大切にしまい、食卓へ向かう。
今日は色々あって腹が減ったからな、食いまくるぞ。

夏休みが嫌いな高校生はいないだろう。
部活、旅行、遊び、家でダラダラ。普段できない事ができる、自由な時間。
そして俺も、そんな例に漏れず家でダラダラ過ごしているのだった。
あの事故から一週間。
ただ一つを除き、俺はそれまで通りの生活を送っている。
その一つというのは、夢。
あれ以来、俺は毎晩夢の中で奴と会っている。勿論あの森でだ。
それでわかったのは、その白狼がレテという名を持つ事、そしてやはりこれは夢の世界での出来事だという事。
夢の中でこれは夢だ、と言われてもなにかおかしい気がしたが、他に考え付かなかったのでそういうことにしておこう。
ようするに俺は毎晩毎晩同じ夢を見て、しかも次の日に見るのは必ずその夢の続きで、その中でも時間が進んでいて、そんで俺は・・・あぁもう・・・めんどくせぇ。
話す内容も何の事無い、日常会話程度だし、あの夢にどんな意味が込められているのかさっぱりわからん。
レテ本人（人じゃないが・・・）に聞いてみても、

『いずれわかる』
ってなんだそれ。全然わからんぞ。
しかも、レテは毎回必ず突発的に駆け出してどこかえ消えて行き、それと同時に朝になっているという寸法。
今晩こそは問いただすぞ、と決意したところに、
ピンポーン――――――・・・・・・
呼び鈴が鳴り、俺は玄関へ向かった。

ドアの前に立っていたのは、よく見慣れた顔だった。
「おう、舞。どうした？」
幼馴染の少女はくるりと一回転して、
「おう霧くんではないか！　どうだね、似合うかね？」
そういって起伏の乏しい胸を張る。彼女は白地の薄いワンピースを着ていた。胸元に赤い花をかたどった刺繍と、白いフリフリの・・・なんていうんだっけか、そんなのがついてる。
こうしてみると、なるほど。確かに良い具合に日焼けした舞の肌と相まって不思議な魅力を放っている。
と思ったので、素直に、
「あぁ、似合ってるぞ」
と言ってやる。するとそれが予想外の回答だったかのように、舞はキョトンと目を丸くする。なんだよそれは、なんて答えると思ったんだ。
だがすぐに悪戯っぽい笑みを浮かべ、
「ほんとにぃ？」
「あぁ」

「じゃあさ、ムラムラする？」
「ぶっ！」
思わずふきだしてしまった。舞はそれをみて、ちょっと～汚いでしょ～、とか言って一歩バックステップ。
「じょ～だんだよ～、何本気にしてんのさ～」
そういってケラケラ笑ってやがる。この女・・・。
「ったく・・・ところで何の用だ？　その格好を見せびらかしに来たわけじゃないんだろ？」
気を取り直してたずねてみる。
「ん～、それもあるんだけどね」
あるのかよ。
「霧ちゃんどうせ暇でゴロゴロしてるんでしょ？　だったら一緒に遊びに行かないかな～、なんて」
「ふむ、デートか？　まぁ暇なのは確かだからいいぞ」
と、自然に返したのだが、舞は少し俯いて、
「デ、デート・・・になるのかな・・・これって・・・・・・だよね・・・男と女だもんね・・・・・・・・・」
小声でブツブツなにかを呟いている。心なしか耳元まで真っ赤になってる気がするが、どうしたんだコイツ？
「どうした舞、付き合ってやるっていってるのに不満なのか？」
軽く肩を叩きながら尋ねると、舞はバッ！　と顔を跳ね上げ、
「え、えぇっ！？　なに、どうしたの？」
と目をパチクリさせながら声を出す。
「いや、どうしたって・・・一緒に遊びにいくんだろ？　準備してくるから中に入って待っててくれ」
「え、あ、はい！」
はい、って・・・まぁいいか。
自分の部屋へ戻り、適当に服を選び着替える。黒地に赤い刺繍の入ったポロシャツに、紺色のジーンズ。まぁ普通に出かけるときの格好だろう。

そしてリビングで待たせてある舞の元へ向かおうとしたとき、”異変”を感じた。
「なんだ・・・この空気」
冷房で冷えていた、それまでの心地よい空気とは打って変わり、直接猛暑の外気に触れているかのようなジメジメした暑さ。
額にもうっすら汗が滲んできている。だが、それだけではなかった。
「ッ・・・これはっ！？」
自室にある全てのものが、“歪んで”いた。
机、ベッド、テレビ、本棚。まるで子供のラクガキのような、ぐにゃりとした形状。
だが不思議な事に、本来なら構造的にあり得ないはずの状態なのに、それらは一つとして壊れていなかった。
「くっ・・・どういう事だ・・・」
額の汗を拭い、どう対処すべきか思考する。その時、
『きゃあああああああ！！！』
ちょうど自分のいる真下のあたりから、叫び声があがった。自室の真下はリビング。そして今そこにいるのは・・・、
「舞っ！！！」
瞬時に、声の元へ向かうべく、部屋を出る。階段もあり得ない捻じ曲がり方をしていたが、まだ侵食されきっておらず、一気に駆け下りる事ができた。
そして突き当たりの扉を開けようとして、ふと手が止まった。
（これ・・・触っても大丈夫なのか？）
だが迷っている間も中で何かが起こっている。
（くそっ、舞！　今行くからな！）
腹を決め、思い切り扉を蹴り飛ばす。するとそこにいたのは・・・。
「舞！　・・・え？　お前は・・・」
「き、霧・・・ちゃん・・・」

力なくペタンと座り込んだ舞と、流れるような純白の毛を持つ巨大な狼――レテ――。
「お前・・・レテ・・・」
『霧か、この娘は・・・』
そういってジロリと舞を見つめる。
「そ、そいつは時元舞って言って、近所に住む幼馴染なんだ。だから乱暴なことは・・・」
『時元？』
舞の名前を聞いた途端、レテは目を細めた。舞の肩がビクッと震える。
『そうか・・・・・お前が・・・』
何かを悟ったかのように息をつき、こちらへ向き直る。
『霧、私と・・・』
ピキッ・・・
レテがなにか言おうとしたまさにその時、室内で何かが割れる音が聞こえた。
「えっ・・・なんだこの音？」
ついにあり得ない捻じ曲がり方をした家具が悲鳴を上げたのかとも思ったが、違った。もっと深くから、空間そのものが壊れる音。
『くっ・・・もう来たのか！　霧！　娘を連れて私から離れるな！！！』
「あ、あぁ！」
レテのあまりの剣幕に、言われるがままに舞を抱えて白狼の足元へ寄る。
「レテ・・・？　いったい何が・・・」
俺が言い終わる前に、白狼が焦りの入り混じった口調でまくし立てた。
『霧、よく聞け。これからお前とその娘を“あちら側”へ送る、そこで“ラヴクラフト”という男を探せ、奴がしばらく面倒を見てくれる。それから・・・』

「ちょ、ちょっと待てよ！」
俺は必死で抗弁する。
「なんだよあちら側って！　大体今何が起こってんだよ！」
しかしレテは一瞬もの悲しそうな顔をして、
『・・・お前たちには本当に申し訳ないと思っている。だが今は時間が無いのだ！』
オォーン――――――
そしてレテが吠えた途端、世界がはじけた。
舞と共に真っ白な光に包まれる寸前、俺が見たのは、ひび割れた空間から出てきた腕・・・まるで映画の中のモンスターのように黒い鱗で包まれた異形の腕と、それに向かって駆け出す白狼の姿であった。

第3話　コワレル日常（後書き）

どうもはじめまして、３話目にしてようやくご挨拶です。Ｊｅと申します。遅すぎますよね、はい、ごめんなさい・・・。
ともあれ、ここまで読んでいただき、本当にありがとうございます。自分で小説を書くのは、この作品が初めてなもので、色々と突っ込みどころ満載ではあると思いますが、温かく見守ってやってください。そして願わくば、ご意見ご感想、アドバイス、間違いの指摘等を頂ければ嬉しいと思っています。どんな些細なものでも厳しいものでも、真摯に受け止める所存なのでドシドシお願いします！　そしてなるべく全てお返事ができるようにしますので。
さて、３話目にしてようやくキーワードに入っている異世界って言うのが意味を持ちそうになってきた本編。
筆者ともども未熟な本作品ですが、是非お付き合い頂ければ幸いです。
それではこの辺りで！

第４話　金色の重戦士

「あだっ」
ドサッ、と尻餅をついて、思わず声をあげる。
「いってー・・・なんなんだ一体」
レテという白狼の、理解しがたい一連の行動。いや、そもそも何で奴が現実世界にいたんだ。
確かにリアルな夢だなぁ・・・とは思ってたが、まさかこんなドッキリが待っていたとは。
「つーか、ここどこだよ」
一面に広がる木、木、木、そして木。森である。
一瞬レテと出会った森林を思い浮かべたが、ここにはそのようなドッシリした圧迫感もなければ、視界を覆う濃霧もない。
そこにあるのは淡い緑色の葉が擦れあう音と、鳥、あるいは虫の鳴き声。頬をなでる風は、微かに枯葉の匂いを含んでいて心地よかった。
とそこで、重要な事に気がつく。
「あれ？　舞は？」
自分の腕にすっぽりと抱え込まれていた幼馴染の姿が、どこにも無かった。
「おーい！　舞ーーっ！！」
――――――バサバサバサッ・・・
大声で呼んでみるが、帰ってきたのは突然の音に驚いた小鳥たちが飛び立つ音のみ。
「確か・・・一緒に飛ばされた筈だよな」
ほんの数分前のことを思い出す。
レテは言ったのだ、『これからお前とその娘を“あちら側”へ送る』と。
一体どこに送られたのか検討もつかなかったが、確かに言ってい

た。
「つーことは、どっか別の場所に飛ばされたか・・・」
ふぅ、と一息つき、立ち上がる。
「とりあえず・・・ここから出なきゃな」
すぐ近くに砂利の敷き詰められた道があったので、まるっきり深い森へ飛ばされたワケでもないようだ。
近くの町まで行って助けを・・・と思ったとき、なにかが顔のすぐ横を通り過ぎた。
「っ！？」
鋭い痛みを感じ、頬に手を伸ばす。
「・・・血？」
直後、背後に凄まじい殺気を感じた。咄嗟に前方へ転がる。
その瞬間、高速で飛来する物体が頭上を掠めた。
「な、な、なんなんだ畜生！？」
ヤケクソ気味に振り向くと、そこには、
「えっ・・・」
そのモノの姿に、絶句した。
銀色に光る、鋭い双眸。２ｍはあろうかという巨大な体躯。その全身を、真っ黒な鱗が埋め尽くしている。そして、正面に突き出された左腕は、一部が鱗を失って薄い煙を上げていた。
「なん・・・だよ、これ・・・・・・聞いてねぇぞ・・・」
本能が危険を知らせるも、あまりの恐怖で体がすくんで動かない。次の一撃を避けられたのは、まさに奇跡であった。
「うわっ！？」
その化け物が伸ばした左腕から、何かが放たれる。ソレは俺の肩を掠め、背後の巨木へと突き刺さった。
「鱗・・・？」
深々と幹を抉ったソレは、鈍い光を放つ黒い鱗であった。
「く、くそっ・・・とにかく逃げないと・・・ッ！」
震える足に力を込め立ち上がり、化け物から距離をとろうとする。

だが、
「ニ・・・ガ・・・・・・サン・・・」
そいつは大きく裂けた口を広げ、あり得ない加速力でこちらへ突進してくる。
もうダメだ。そう思い、目を閉じたときだった。

――――――ギィァアアアアア・・・

この世のものとは思えない、恐ろしい悲鳴が森へと響き渡る。
無論俺のものではない、今まさに俺を食い殺そうとしていた、目の前の化け物の声だ。
黒光りする鱗をボロボロと落としながら、頭から真っ二つに割れる異形の怪物。
ドシャッ・・・と、肉が崩れる音を撒き散らしながら、そいつは崩れ去った。
「・・・あ」
それを見た途端、かろうじてバランスを保っていた足から力が抜け、その場に尻餅をつく。危なかった、マジで死ぬかと思った。
けど一体何が・・・、そう思うより早く、目の前に何かが降りたった。
腰の辺りまで伸びた金色の髪、見るものを射抜くかのような蒼氷色の瞳、そして日本人離れした美しい顔立ち。黒いロングコートを纏い、右手にはかの斬馬刀を思わせる、巨大な大剣。
その外人男は、一瞬だけ俺を目に写し、すぐに怪物の死骸へと向かった。
「あ、あの・・・」
「食屍鬼(グール)か、もうこんなところまで・・・という事は、リュゼアン一帯はもう・・・・・」
必死に声をかけてみるも、あっさりスルーされる。
「あのー・・・」

「どうする・・・イシューターに知らせるべきか、しかし・・・」
まったく見向きもしないので、少し腹が立って声を張り上げる。
「あのー！！」
「うるさい！　何の用だ！！」
その外人男はこちらを睨み付け、怒鳴り返す。うはー怖えー・・・。だが負けずに問い返す。
「そ、それはアナタが？」
そうして俺の指差す先――――グールと呼ばれた化け物を見て、男は言う。
「あぁ、俺がやったよ。それがどうした？」
やっぱりか・・・どうやったかは知らんがすげぇな。
「あ、ありがとうございます。助けてもらって」
「あぁ」
そしてそいつは、サラリと言った。
「気にするな、エルファシアの民を守るのが、今の我らの役目だからな」
・・・エルファシア？　なんだそれ。
「エルファシアって・・・なに？」
「はぁ？」
俺からすれば至極当然の問いかけだったのだが、その男は奇妙なものを見る目つきで俺のことを見てきた。
「なにを言っている、この森にいるという事はお前はエルファシア人ではないのか？　こんなご時世に海外旅行というわけでもないだろう」
日本にそんな地名があるというのは聞いた事が無いし、エルファシアって国があるというのも聞いた事が無い。いや、世界のどっかにはあるのかもしれないが。
「俺は・・・日本人ですけど」
「ニホンジン・・・？　そんなもの聞いた事が無いぞ。何者だお前は」

いや、何者って言われても・・・ただの高校生としか・・・・・・・。
「コウコウセイ・・・？」
ダメだ、全然通じない・・・どうしようか。
「あー・・・学生です、学生」
「学生・・・なるほど」
お、通じたぞ。と思った矢先、
「学生という事は、王都の者だな。あそこは現時点、この大陸でもっとも安全な場所のはずだが・・・それがなぜこんなところに？」
うっさんくさそ～にこちらを見つめる外人男。さすがに喋る狼に飛ばされてきたとも言えず、どうしたもんかと困っていると、
「まぁいいだろう。この近くに村がある。俺の仲間もいるから、そこで話を聞こうか」
と、踵を返して歩き出す。
「あ、ちょっと！」
慌てて声をかけると、男は足を止め、面倒くさそうに振り向いた。
「なんだ、もたもたしてると置いていくぞ。また奴等に襲われたいのか？」
先程の事を思い出し、思わず身震いする。
「ち、違いますよ。俺、渡世霧って言います。あなたは？」
「あぁ、そういえばまだ名乗ってなかったな。私はセラス・ウェイトリー。別に覚えなくても良いぞ」
男はそういい残すと、足早に歩き出す。
俺は本当に置いていかれないために、懸命に追いかけるのだった。

第４話　金色の重戦士（後書き）

こんばんは、Ｊｅです。
ようやく異世界編に入りました。前フリで３話も使ってしまって・・・
・我ながら情けないｏｒｚ
これから色々と新キャラクターとか地名とか、出していくつもりです。基本的にネーミングは最後まで悩んじゃって、その場で付けてしまう事も多いんですがこれって大丈夫なんですかね・・・実際主人公とヒロインの名前以外は当初予定していたものから大幅に変更しちゃってます＾＾；
という風に、文体だけではなく物語の設定の段階から躓きまくってるわけでして・・・（泣）
なのでこうすればいいよ、ここはおかしいだろ、というアドバイスを頂ければ、ものすごく有難いです、お願いします＞＜
それではこの辺で・・・第４話、読んでいただきありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0299f/

霧の舞姫

2010年10月10日03時30分発行